

大通公園を望む窓辺から

30年前の中国東北地方 との医療交流

常任理事 青木 秀俊 あおき ひでとし

先日1990年頃の病院誌を調べていたら、当時当院に留学研修していた二人の中国人の手記をみつけた。詳細は省くが、当時全国の自治体病院と中国東北地方（吉林省、黒龍江省、遼寧省）間に医療交流があり、当院でも数年間、医師と看護師数名を研修生として引き受けていた。その代わり研修病院から1～2名の職員が中国に招待された。

私の場合は、1993年8月末より3週間弱、全国から集まった十数名とともに訪問した。主な日程は、北京（病院視察）→長春（病院視察、医療交流）→西安→上海であったが、期待どおり観光が7割の旅行となった。とにかく日本との違いに驚きの毎日で、北京空港間の高速道路に荷馬車が走り、自転車の多さと交通規則無視のため道路横断も命がけ、三食すべて中華料理でほぼすべてにパクチーが入っておりうんざり。帰国近くに上海の日系ホテルに全員で朝食を食べに行き、コーヒーとトーストに感激。またぬるいビールは当たり前で、さすがに最初から栓が抜かれたものはガイドの忠告に従い交換してもらった。

長春は人口700万人の大都市で、2ヵ所の医療機関と視察、医療交流を行った。日本側から5～6名の医師が講演を行ったが、私は「動脈グラフトを用いた冠動脈バイパス術」について発表した。講演会の前に病院幹部との昼食会があり、中国の慣例に従い白酒ばいちゅうによる度重なる乾杯のせいで、かなりの酩酊状態になったが何とか発表を終えた。

1993年当時は、天安門事件から4年しか経っていなかったが、社会的混乱はみられず国全体が活気にあふれ躍動感が見られた。医療設備は日本よりかなり遅れていたが、とにかく若い医師があふれ講演会も盛況で、新しいものを吸収しようとする意気込みで圧倒された。



ひそやかな愉しみ

常任理事 寺本 瑞絵 てらもと みずえ

たまに、御朱印帳を開く。背筋が伸び、鼻腔の通りが良くなる、気がする。それぞれの特徴を持った印を眺めるのも楽しいし、忘れていた思い出も立ち上る。コロナ禍で出かけられない日々の、ひそやかな愉しみだ。

昔から、神社仏閣が好きだった。信心深いたちでは決してないが、鼻の奥がスーッと通り、姿勢が良くなり、丹田というのか心や体の重心が整う感じが好きなのだ。清潔になった気がする。

子供のころ、習いものに行く途中に神社があった。神社を抜けるのは近道だった。高校時代には通学路となり、電車を降りて帰る途中によく寄った。正面の階段ではなく、横のなだらかな通りから境内に上がる。本殿にお参りをするのは、試験前くらいだったかもしれない。夏祭りの出店が並ぶ境内、りんご飴。正月には神社は少しよそ行きの顔になる。獅子舞に頭を噛まれ、邪気を払う。春には桜が舞い、秋には落ち葉の重なった上をキュッキュと歩く。日常生活の中に神社があった。

今でも、学会・旅行に行くと、神社を探してしまう。御朱印集めが趣味に加わったのは、それほど古くない。とうの昔から御朱印帳なるものの存在は知っていた。老若男女に人気があるらしいと。ただ、御朱印を頂戴する列に加わりたとは決して思わなかった。それなのにだ。数十年ぶりに訪れた平等院鳳凰堂で、何の気なしに覗いた小さな社で、なんともシンプルで素敵な御朱印帳が目にとまった。つい購入し、印を頂戴した。そこからだ。始めてみるとなかなか面白く、奥が深い。神社の特徴が墨書きと朱印でよく顕われており、毎回頂戴するたびに、ほうーっと見入ってしまう。

自宅でも御朱印帳を開く。忘れていた境内や空気の香りが立ち上る。コロナが落ち着いたら、八百万の神々に、大好きなお顔の仏様に会いに行きたい。それまでは心静かに御朱印帳を眺めよう。